



監督・脚本・企画＝カン・ジェギユ／撮影監督＝ホン・ギョンピョ／出演＝チャン・ドンゴン／ウォンビン／イ・ウンジュ／コン・ヒョンジン（UIP 配給／2004年韓国映画／148分）

今、韓国映画が元気！『SILMIDO（シルミド）』を超え、観客動員数1300万人を樹立した話題作が、日本でも2004年6月26日、全国一斉ロードショー。「魂がふるえ、熱い涙がとまらない……」という新聞紙上の宣伝文句どおりの感動巨編。初日の、満員の観客席では、あちこちからすすり泣きの声が……。

### 🎬 今、韓国映画が元気！

『シュリ』（99年）の大ヒット以降、続々と続く韓国映画の人気。そして、韓国ドラマ『冬のソナタ』の大人気。今、韓国映画が最高に面白い！『SILMIDO（シルミド）』に続いて、2004年6月26日、日本でも『ブラザーフード』が全国一斉ロードショー公開された。韓国では、2月6日に公開されるや、オープニング新記録を更新したうえ、『SILMIDO（シルミド）』を上回る観客動員数新記録1300万人を達成したという、超話題作。これは何としても観なければ……。私は珍しく、公開初日の土曜日朝一番に映画館へ……。

### 🎬 近くて遠い朝鮮戦争

日本は1960年代に入ると、高度経済成長時代に入っていったが、1945年の敗戦からの戦後復興を遂げるについては、お隣の国でおこった朝鮮戦争における「朝鮮特需」が大きく寄与したことはよく知られている。しかし、1950年6月から1953年7月まで、3年間にわたって繰り返された同一民族間における、悲しむ

べき朝鮮戦争については、私も含めて日本人は意外に知らない。

アメリカの「南北戦争」は、有名なマーガレット・ミッチェル原作の映画『風と共に去りぬ』(39年)をはじめ、近時の『コールドマウンテン』(03年)等によくお目にかかっているため、その歴史的事実や数々のエピソードはよく知られている。しかし、南北に分けられた朝鮮半島におけるこの朝鮮戦争は、映画や小説で描かれることがほとんどないこともあって、よく知らないのが実情。私が知っている情報も、「北」におされていた韓国軍が、アメリカ軍の仁川上陸によってもち直し、反撃に移ることができたという程度のもの。

『ブラザーフード』は、この「近くて遠い」朝鮮戦争を真正面からとりあげるとともに、その戦争における、ジンテ（チャン・ドンゴン）とジンソク（ウォンビン）の兄弟愛、そして、家族愛を格調高くうたいあげた作品だ。

## 朝鮮戦争は誰のための戦争？

日本は1945年8月15日、無条件降伏したが、その後も、中国では、対日戦勝利の果実を誰が獲得するのかをめぐって、国民党と共産党の対立・内乱が続いていた。また、朝鮮半島は、日本の統治から解放されたものの、北緯38度線によって、南北に分断され、南にはアメリカ、北にはソ連が進駐して、分割統治が開始されることになった。

そして、1948年8月15日、南に成立したのが、李承晩を大統領とする大韓民国であり、1948年9月9日、北に成立したのが金日成を首相とする朝鮮民主主義人民共和国。これによって朝鮮半島は、民主主義と共産主義、そして、アメリカとソ連の対立の縮図となってしまったのだ。こんな緊張関係の中、1950年6月25日突如、「北」は38度線を突破し、南への侵攻を開始した。これは、一体誰のための戦争なのだろうか？

## 弟思いで一家の中心のジンテ

靴磨きをしながら、母と弟、そして妹たちの生活の面倒をみているのは、父亡き後一家の中心となっているジンテ。そんなジンテの願いは、弟に勉強をさせ、大学に進学させること。優しいジンテの気持を知る、婚約者のヨンシン（イ・ウ

ンジュ)もこれを支え、一家はソウルのまちの中で、貧しいながらも楽しく幸せな毎日を送っていた。

## なぜ2人は戦争に……？

「北」からの侵攻によって、ソウルをあとにすることになったものの、ジンは家族とともに再びソウルに帰ることに自信をもち、みんなを励ましなが、南への避難を開始した。家族以上に大切なものなど存在せず、軍隊に入る気などサラサラもっていない、ごく普通の「韓国人」であったジンとジンソクが、なぜ戦争に行くことになったのか？

それは、「18歳以上30歳未満の男は前に出ろ！」という、「強制徴集」によるものだった。弟の病気を理由に、弟を連れ戻そうとするジンだったが、軍隊はそんなことで容赦はしない。そればかりか、「一家に1人」という原則にもかかわらず、弟の徴集に抗議し、抵抗したジンも強制徴集され、2人を乗せた列車は、無情にも母、そしてヨンシンを引き裂いてしまった。

## 『プライベートライアン』を上回る数々の戦闘シーン

『プライベートライアン』(98年)の冒頭約20分間の戦闘シーンはものすごい迫力だったが、その後は4人兄弟の末っ子であるライアン二等兵を連れ戻すためのストーリーが中心。しかし、この『ブラザーフッド』は、それを上回る迫力の戦闘シーンの連続。

朝鮮戦争は、当初「北」が優勢で、韓国軍は洛東江まで追いつめられ、敗色濃厚となっていた。そんな中、アメリカ軍(国連軍)が、仁川に上陸して、韓国軍は反撃を開始。ソウルを奪還し、逆に平壤まで攻めのぼり、遂には鴨緑江まで「北」を追いつめた。ところが、突然の中国軍の参戦によって、再び形勢逆転。韓国軍は追いたてられ、中国軍がソウルに迫ってきた。

そんな中、中国本土の爆撃、原爆の使用などの強硬策を主張するマッカーサーが解任され、休戦会談が開始されたが、交渉は難航した。そして、1951年から2年間にわたって続く杜密嶺での一進一退の高地戦の攻防。このように、朝鮮半島の北から南までをいっぱいに使った激しい攻防が各地で展開されたが、それらの

塹壕戦も市街戦も、ともに悲惨なもの。そんな肉弾相うつ迫力ある戦闘シーンが、この映画ではいっぱいだ。

### ♣ すれ違う兄弟の気持……

強制徴集されたジンは、いつしか地雷埋設作戦や奇襲作戦などの危険な任務に自ら志願し、戦功を立てていくが、これはすべて弟の除隊のため。しかし、戦闘の連続の中、人が変わったように、「戦闘マシーン」と化していき、北朝鮮人民軍大佐を捕虜にするという自分の戦功のため、犠牲になった戦友のヨンマン（コン・ヒョンジン）の死を省みない兄を、ジンは次第に疑い始めていった。それがピークに達したのは、かつてソウルでジと一緒に靴磨きをしていたヨンソクを北の敗残兵の中に発見したとき。

「アカは殺せ！」と冷たく言い放つジンを、信じる事ができない目で見つめるジソク。ジソクは、自分の心が次第にジンから離れていくのをどうすることもできなかった。

さらに、やっとソウルのまちで、ヨンシンとの再会を果たしたジソクだったが、ヨンシンが国民保導連盟に加入していたことを理由に、ヨンシンは防諜隊と青年団からアカだと認定され、「調査」を受けることに。これを助けようとして駆けつけたジソクとジンだったが、「北の兵隊と寝た女のくせに！」という言葉に一瞬躊躇したジンのために、ヨンシンは青年団長（キム・スロ）によって……。これを激しく責めるジソク……。

### ♣ ジソクは救助できたのか？

この「事件」によって連行されたジソクは、倉庫の中に。数々の軍功により勲章を得たジンは、大隊長にジソクの除隊を申し出るが、中国軍が侵攻している今となっては、そんな過去の約束など反故同然。そして大隊長は、倉庫を焼き払えと命令……。

倉庫の中からジソクを必死で助け出そうとしたジンだったが……。焼失した倉庫の中に残っていたのは、ジンがジソクにプレゼントした、あの万年筆と既に骨となった遺体ばかり。怒りを爆発させたジンは……？

## 感動の連続と涙のラストシーン

この映画は148分の大作だが、次々と転戦して闘うジンテとジンソク、そしてその戦友たちの、めまぐるしい動きの中に、2人の兄弟愛を中心とした数々のエピソードが挿入されており、決してあきることがない。そのたびに、身を乗り出してスクリーンに見入ってしまうことまちがいなし。

しかし、映画の冒頭とラストは、この戦争を生き抜き、今は年老いたジンソクが、孫娘とともに兄の遺骨を拾いにいくシーン。白骨体のそばにあったのは、1本の万年筆。ジンテがジンソクにプレゼントした、あの思い出の万年筆。そして、ジンテとジンソクが最後の杜密嶺の戦場で別れた時、ジンテがジンソクに渡そうとしたのを、再会するまでジンテが持っていてくれと頼んだあの万年筆だ。思わず、涙を流しながらスクリーンを見つめていると、隣の夫婦からもすすり泣きの声が……。そして、次第に観客席のあちこちからも……。

これ以上多くのストーリーを紹介する必要はないだろう。とにかく、朝鮮戦争の歴史的背景やその経緯を一応理解したうえで、各地の激しい戦闘の中で、戦友たちとともにさまざまに展開していく2人の兄弟愛と家族愛をじっくりと堪能し、そして、涙すればいい作品だ。こんなすばらしい映画をつくり出す、現在の韓国映画の元気さにホントに心から拍手を送りたい！ 2004(平成16)年6月26日記

— ミニコラム —

### 今『冬ソナ』以上に激動する韓国

2004年の今、『冬ソナ』をはじめとする韓流の大ブームだが、韓国は3月の大統領弾劾決議と4月の国会議員選挙をめぐって激動を続け、首都ソウルの移転問題が新たな議論のタネ。そこに今また「高句麗」をめぐって中国との大論争が開始された。これは、従来韓国の歴史とされてきた、紀元前後から7世紀にかけて朝鮮半島北部に存在

した朝鮮民族の国家「高句麗」を、中国が、中国史に編入させようとする中で起こった問題。「たかが歴史」ではない！ 既に「深刻な憂慮」が表明され、重大な外交問題に発展する可能性も……。ヨン様にうっとりするだけでなく、こういう歴史と現実の外交問題のお勉強もお忘れなく！